

あなたの宝物は何ですか…。

# 夏草の女たち

■優秀映画鑑賞会推薦・中野区教育委員会推薦



■高橋 勝監督作品

プロデューサー 六塔智美・内藤三郎 / 原作 落合恵子 (講談社) / 脚本 高際和雄  
音楽 宇崎竜童・川崎真弘 / 撮影 山田一夫 / 編集 浦岡敏一 / 美術 佐野均  
照明 福富精一 / 録音 神蔵昇 / 監音 堀内戦治 / 製作担当 大場正弘 / 監督補 白井政一 / 製作協力 岡本正勝 / 製作 株六塔社 / 協賛 岩国市・岩国市観光協会・  
村重酒造株式会社 (金冠黒松) / 上映実行委員会 春田克典・大川博史・関弘美



阿木 高子  
今井 樹子  
高山 真弓  
山岸 夕子  
片桐 矢子  
本田 克子  
中垣 麻子  
神田 重子  
濱田 博子  
小堀 宏子  
堀内 孝史  
古谷 雅人  
沢谷 竜二

8/8土 - 8/30日

上映時間(全日) 1:00 | 3:00 | 5:00 | 7:00  
前売券800円(当日1,000円のところ)好評発売中!!  
●チケット・セゾン880-6666 ●チケットぴあ237-9999  
「夏草の女たち」上映実行委員会 Tel.230-1373

東邦生命ホール

JR渋谷駅南口東側より徒歩5分 Tel.499-1111





『女性の時代』と言われる今だからこそ、忘れないでいて欲しい  
『耐性』という女性の強さ、哀しさ、たくましさ

高橋 勝 (監督)

3年前の夏、猛暑と蚊に悩まされながら撮ったこの映画が、ついに日の目を見る日がやって来たことに、我ながら深い感慨を覚えています。年々むずかしくなっていく映画制作状況の中で、日頃はテレビ番組の制作・演出にエネルギーを費やしている私が、これだけは何としてでも撮っておきたい、と、たまらない衝動に駆られて取り組んだ作品が、この『夏草の女たち』でした。諸般の事情で今日まで、公開されずに来た作品ですが、描いた世界は、決して一夜で色褪せてしまうようなものではないと確信しています。

『女性の時代』と言われる今だからこそ、忘れないでいて欲しい。『耐性』という女性の強さ、哀しさ、たくましさを追ってみました。

昭和27年。幼なかった私が見ていた時代の光景と女性たちの生きざま——これは、私の宝物です。

最後に、今回の上映に1年を費していただいた上映実行委員会の人々に、心から感謝すると同時に、素晴らしい人達が、今尚、此の世に居るのだなと、痛感する今日此頃です。

# 夏草の女たち

## ■物 語

昭和27年、夏。東京・東中野。

その一角に、秋には立ち退きを迫られているオンボロアパート、通称「東中野ハウス」がある。そして、このアパートには、戦争の傷跡を負った女たちが住んでいる。今日も又……。

元芸者の初江(今 陽子)が睡眠薬自殺を計った。隣りの部屋に住む米兵のオンリーこと、通称ミー(山岸 真弓)は、「狂言よ。旦那が来なくなると薬飲んでみせるのよ」と、無然として言った。

「東中野ハウス」で唯一人の子供である、友子の目から見れば、このアパートの住人たちは、明らかに普通の大人とは違っていった。

パトロンを訪を待ち続ける初江、アメリカ兵を連れ込むミー、大学生と同棲しているダンサーの瞳(高樹 滯)、いつ息子を取り戻されるかと、びくびくしながら生活している信子、そして、父のいない自分(友子)の家族……。

謙一(中垣克麻)という男の子がやって来た。料理屋の仲居をしている信子(片桐 夕子)が、別れた夫の元からこっそり連れてきた自分の息子である。

幼ない友子に大人たちの事情まではわからないが、謙一の手を取り、原っぱを走り回れば、何故か心のなかのモヤモヤも、消えていくような気がするのだった。

柴田(本田 博太郎)先生は、同じアパートに大学生の弟と住む中学の先生である。誠実な人柄で友子と謙一をとても可愛がってくれる。しかし、友子(神田 亜矢子)は、母の雅代(阿木 燿子)が、柴田先生のまではよく笑い、華やいでみえることを見逃さなかった。母の心が、自分から、柴田先生に向くの不快に思う気持ちとそんな母を奇麗だと思ふ気持ちの、二つの感情を友子は、持て余していた……。

娘の不安を感じ取った雅代は、布団の中でしっかりと友子を抱きしめて「お母ちゃまには友子が一番大事なの」と言った。

母・雅代は葛藤していた。戦死した友子の父(古尾谷 雅人)を忘れようとする……。

母の悲しみが友子の小さな胸にも伝わってくる。

しかし、夏祭りの日、新たな悲しみが、友子を襲った。あれほど仲の良かった謙一が、信子の前夫に、無理矢理連れ去られてしまったのだ。

息子を奪われた夜その、生きる張りを失くした信子は倒れてしまい、そのまま息絶えてしまった。

信子の初七日。

女たちは位牌の前に酒をくみかわしていた。

初江が、ポツリポツリと語り始めた。

婚約者がいて、その人の戦死広報があったにもかかわらず、その相手が去年帰ってきたこと、今更出迎えに行くことはできないこと——ミーの愛人・米兵(団 時朗)も朝鮮に行ってしまった——死んだ信子も、戦死した夫の弟に嫁がされたことから悲劇を負っていた——ダンサーの瞳も戦争で親を亡くし、進学を断念していた——。

皆、戦争を引きずって生きていたのである。

語りながら、泣きながら、女たちは悲しみを呑み込むように寿司を頬張る。

友子は、原っぱの向こうに消えた謙一のことを思い出しながら、母に言った。

「柴田先生とのこと、いいから……」

7才の友子は、初めてひとつの季節の終わりを知った。

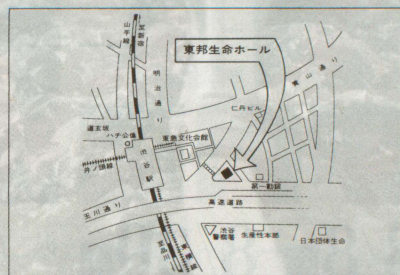
強さとは何なのか、  
優しさとは何なのか。

阿木 燿子

私たちが、今、幸せにいろいろな自由を得られるのは、たくさんの先輩女性たちの努力の結果というか、流した涙の集大成のような気がします。隣りに住んでいる人は、決して他人ではなく、人の悲しみは自分の悲しみで、人の喜びも自分の喜びであった時代——。優しい心が集まった時代を、私は素敵だと思います。だから、もう1回、そんな意味で時代を振り返るのもいいのではないかという気がします。本当に女の人の強さとは何なのか、人の優しさとは何なのか。決して、ノスタルジーだけではなく、便利さと文明とかの言葉と引き換えに失ってしまったものを、じっくりと見ていただける映画だと思います。

8/8(土) - 8/30(日)

時間(全日) 1:00 3:00 5:00 7:00



東邦生命ホール

JR渋谷駅南口東側より徒歩5分 ☎499-1111